

ひとりでに孵化

失恋後ひとり旅……っていうベタに縋る私を掬い救って

いっせーので椅子を倒した夜行バス間違えたこと数えて眠る

身体まで雁字搦めになったまま見知らぬ街で車内が白む

あけぼのの心細さは傷口を知られていない心強さで

再来月変わるはずだった苗字告げチェックインする「はい、一人です」

客室の奥の名前が分からないけれど必ずある間に収まる

「髪絶対ショートがいいよ」私といううつわの淵はぼけて落ちゆく

自己嫌悪かくしてくれる湯煙に赤ちゃんみたい匂いが交ざり

美化された思い出よりも美しくなるため『美肌の湯』に溶けこむ

「あの人でいいの?」「いいの!」と胸張って幸せだって言い聞かせてた

脳だけはクリアになれる露天風呂病も恋も対処は一緒

髪ショートにしたから湯上がり楽ちんで何処へだって今すぐ行ける

気遣いも遠慮も不要な一人用お櫃たいらげ密かにドヤ顔

今までの自分ここまでお疲れさま慣れない枕がむしろ最高

朝ぼらけ八重洲の風も正面に浴びれる私の芯は燃えてる

孵化したって言っていていいよね、大人でも。絆創膏をべりりと捲る